

二人の受け手に向けた話題の開始と展開
—接触場面と母語場面における三者自由会話の分析—

広島女学院大学
大場美和子

1. 研究の目的

接触場面の三者会話では、参加人数による話者交替の複雑性に、言語能力の問題が加わり、参加者間に役割の不均衡な配分が発生する。また、2人の受け手に対して質問がなされ、その2人が応えうる場合、どちらの受け手がどのように応えるのかが問題となる。そこで、本研究では、三者会話において2人の受け手に対する質問での話題の開始に焦点をあて、接触場面と母語場面、接触場面では非母語話者の言語能力の違いに注目し、2人の受け手がいかに応えて話題を展開させるのかを分析する。

2. データと調査方法

Goodwin (1981) は、参加者を情報量の観点から「知っている受け手／知らない受け手」に分類し、話者は受け手の知識状態を考慮して会話を展開するとしている。また、熊谷・木谷 (2006) は、三者面接調査の2人の回答者が回答を共同構築するやりとりを、「回答者間の相互作用」として指摘している。

分析対象は知人関係の女性3人の20分程度の自由会話で、接触場面 (1名のみNNS) 14組、母語場面8組である。NNSの言語能力は中級レベルで、中級の前半と後半に分けて7組ずつ収集した。情報非保有者の質問による話題開始に対し、2人の「知っている受け手」のどちらかが第二応答発話を行い、いかにその後の情報と発話の配分を参加者間で調整するのかを分析する。

3. 分析結果と考察

接触場面では話題開始の質問がNNSからなされ、2人のNSが情報提供を行って話題が展開し、三者会話でありながらNSとNNSの二者会話のようなやりとりとなった。また、前半NNSでは、2人のNSが自発的に情報提供を行っていた。NSの情報提供に対し、前半NNSが理解の承認を言語的に提示しなかったため、2人のNSが母語話者としての役割を強く意識し、情報提供を自発的に継続させる調整を行ったと考えられる。さらに、後半NNSでは、NS同士のやりとりが観察され、これは、前半NNSほどNSがNNSの言語能力の問題を留意しなかったためではないかと考えられる。一方、母語場面では、第二応答発話は2人の受け手からなされるものの、その後の展開では1人の情報についてやりとりを行う様子が観察された。さらに、接触場面と母語場面の共通点としては、2人の受け手に「回答者間の相互作用」と類似のやりとりが観察された点、自由会話では必ずしも情報要求に応える必然性はなく、2人の受け手の発話とその後の情報提供の配分が不均衡であった点が指摘できる。

参考文献

熊谷智子・木谷直之（2006）「三者面接調査における回答者間の相互作用－同性の友人同士の場合－」『日本語科学』20 国立国語研究所pp.47-65

Goodwin, C. (1981) *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. Academic Press